

平成21年度第2回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2010年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「**平年並み～やや高め**」で経過する。
※引用符「」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。
「**やや**」 : 約3年に1回程度の出現確率
「**平年並み**」 : 約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
 - (2) マサバは前年並み。
 - (3) ゴマサバは前年並み。
 - (4) マイワシは前年並み。
 - (5) ウルメイワシは前年並み。
 - (6) カタクチイワシは前年を上回る。
- ※「前年」は2009年4月～9月。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：香川、今井

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

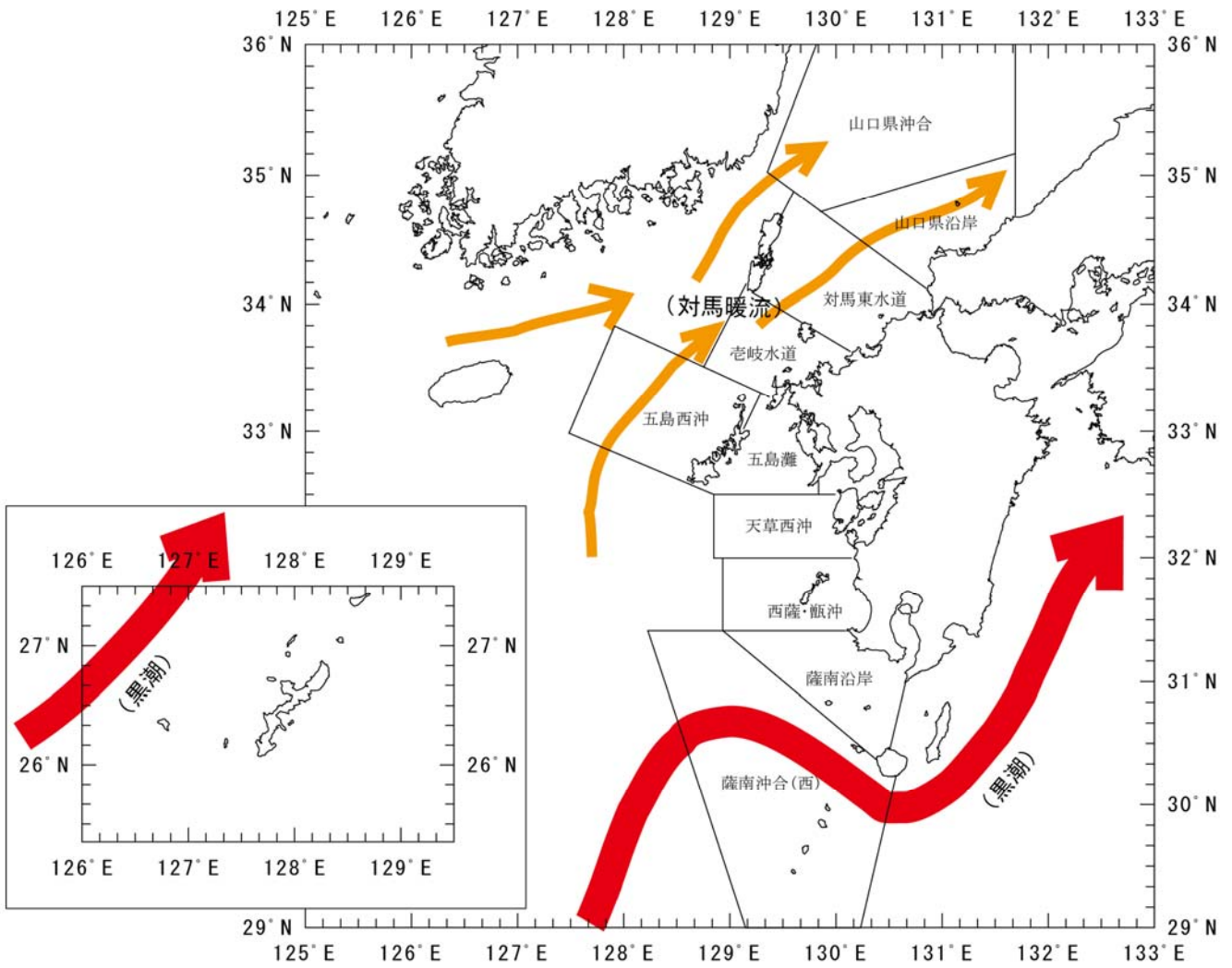
電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2010年4月～9月）

（1）海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、6月には「離岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

（2）表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上で「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2009年10月～2010年3月）

1. 大陸棚上

（1）海面水温

北部：10月「はなはだ高め」、11・12月「かなり高め」、1・2月「平年並み」。

南部：10月「かなり高め」、11月「やや高め」、12・1月「平年並み」、2月「かなり高め」。

2. 黒潮流域

（1）海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、秋季、冬季ともに「平年並み」で経過。

流量は、秋季、冬季とも「平年並み」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、11・2月「接岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過。

（2）海面水温

10月「やや高め」、11～1月「平年並み」、2月「かなり高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

（1）表層水温

山口県沖合：10月「かなり高め」、12月・2月「やや高め」。

山口県沿岸：10月「はなはだ高め」、11月「やや低め」、12月「かなり高め」、1月「やや低め」、2月「平年並み」。

対馬東水道：10月「かなり高め」、11月「やや高め」、12・1月「平年並み」、2月「やや低め」、3月「平年並み」。

壱岐水道：11・2月「平年並み」。

五島西沖：11・2月「平年並み」。

五島灘：11・2月「平年並み」。

天草西沖：11・1・3月「平年並み」。

西薩・甌沖：11・1・3月「平年並み」。

薩南沿岸：11月「平年並み」、1月「やや低め」、3月「平年並み」。

薩南沖合：11・1・3月「平年並み」。

沖縄島南東：10～12月「やや高め」、3月「平年並み」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10月「**平年並み**」、12月「**やや低め**」、2月「**平年並み**」。

山口県沿岸：10・11月「**平年並み**」、12月「**やや低め**」、1・2月「**平年並み**」。

対馬東水道：10・11月「**平年並み**」、12～2月「**やや低め**」。

壱岐水道：11月「**平年並み**」、2月「**やや低め**」。

五島西沖：11月「**平年並み**」、2月「**やや低め**」。

五島灘：11月「**平年並み**」、2月「**やや低め**」。

天草西沖：11月「**平年並み**」、1月「**やや低め**」、3月「**はなはだ低め**」。

西薩・甌沖：11月「**平年並み**」、1月「**かなり低め**」、3月「**はなはだ低め**」。

薩南沿岸：11・1・3月「**やや低め**」。

薩南沖合：11・1・3月「**やや低め**」。

沖縄島南東：10月「**やや低め**」、11月「**はなはだ低め**」、12月「**やや低め**」、
3月「**かなり低め**」。

3. 現況 (2010年3月中旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部、南部ともに「**平年並み**」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「**離岸傾向**」。海面水温は「**かなり高め**」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「**やや低め**」。

(註) 引用符「」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「**はなはだ**」： 約22年に1回程度の出現確率

「**かなり**」： 約7年に1回程度の出現確率

「**やや**」： 約3年に1回程度の出現確率

「**平年並み**」： 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域あじ・さば・いわし長期漁況予報

今後の見通し（2010年4月～9月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2010年級群（2010年生まれ））、1歳魚（2009年級群）、2歳魚（2008年級群）。

魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体：27～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に、15～25cmの0歳魚（豆銘柄）も漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年を上回り平年並み。

(3) 魚体：30～37cmの1～3歳魚（小・中銘柄）が主に、15～28cmの0歳魚（豆銘柄）も漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：前年並みで平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：沿岸域で散発的に漁獲される。

(3) 魚体：漁期前半は15～20cmの1～3歳魚（中・大羽銘柄）が、漁期後半は15cm以下の0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：漁期後半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は18cm以上の1・2歳魚（大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年を上回り平年並み。

(2) 漁期・漁場：主に5～7月に沿岸域に漁場ができる。

(3) 魚体：4月は10cm以上の1・2歳魚（大羽銘柄）に3～6cmの0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が混じり、5月以降は5～10cmの0・1歳魚（カエリ～大羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2009年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2009年10月～2010年1月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

日本海・東シナ海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため、資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年と同程度の高い水準で経過し、2004年にかけて資源量は増加した。2005年以降の加入量水準は近年では低い水準となり、資源量も減少したが、2008年の加入量は増加したとみられ、資源量もやや増加した。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005～2007年は減少した。2008年はやや増加し、約13万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代には比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減した。1998～2000年にかけてさらに減少し、2000～2007年は低い水準で横ばい傾向を示していた。2008年のやや高い加入量のため、資源量は2008年に増加したものの、依然として低い水準にある。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半には27万～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年には13万～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年には41万トンに達したが、1997年には21万トンに大きく減少した。その後もさらに減少し、2000～2006年は90千トン前後で推移していたが、2007年には106千トン、2008年には120千トンと緩やかな増加傾向を示している。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2008年に比較的安定して同程度の水準を保っている。近年では、2004年級群の高い加入量のため、資源量は2005年に高い値を示したが、その後は減少傾向を示している。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の88千トンが漁獲された後、再び5万トン前後の漁獲が続いたが、2004年には31千トンに減少し、2005年には76千トンに増加するなど、近年は変動が大きい。2008年は37千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001年には過去最低水準となった。2004年以降は極めて低い水準ながらも増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は増加傾向にあり、

2007年の漁獲量は14千トンと近年では最も多かった。2008年の漁獲量は11千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

対馬暖流域において、1970年代後半と1980年代後半に資源量が多く、1980年代前半および1990年代後半には少なかった。1990年代後半から2000年まで資源量は漸減傾向にあり、2001～2007年までは資源量がやや増加し、2008年は再び減少したものの2009年は回復傾向にある。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1970年代および1980年代には資源変動は比較的安定していたが、1990年以降に資源量が徐々に増加しはじめ、1997～1999年は極めて高い水準にあった。2000年以降は、資源量は再び安定して推移していると考えられていたものの、2008年および2009年は減少傾向にある。

2. 漁況の経過

2009年10月～2010年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、東シナ海中部および済州島西が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計8万2千トンで前年（2008年10月～2009年1月、9万2千トン）並みであった。マアジは9千トンで前年（5千トン）を上回り、さば類は6万4千トンで前年（7万7千トン）並みであった。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、佐賀県・長崎県では前年を下回り、その他の海域では前年並み～上回り、全体としては前年並みで平年を下回った。漁獲の主体は19cm以下の0歳魚（2009年級群、今後の見通しでは1歳魚、以下同様）と19～24cmの1歳魚であった。マサバは、前年・平年並みであった。漁獲の主体は24～28cmの0歳魚と30～33cmの1歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は11月には26～29cmの0歳魚、12・1月は35～38cmの2歳魚以上であった。マイワシは、低調ながらも全体としては前年を上回った。漁獲の主体は19cm以下の0・1歳魚であった。ウルメイワシは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は15～20cmの0・1歳魚であった。カタクチイワシは、前年を上回り、平年を下回った。漁獲の主体は10cm以上の大羽（1・2歳魚）であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、4～9月期には1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。2008年級群は2007年級群を上回る豊度と考えられる。2009年級群は2008年級群と同程度か上回る豊度と考えられる。2010年級群の豊度を予測するのは難しいが、2009年と同程度と考えると0歳魚（2010年級群）は前年（の0歳魚、以下同様）と同程度、1歳魚（2009年級群）は前年と同程度か上回り、2歳魚（2008年級群）は前年を上回ると考えられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE（1日1隻当り漁獲量）（参考図参照）は、2006、2007年は低い水準だったが、2008年以降は増加に転じた。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は安定している（参考図参照）。漁獲の主体となる1歳魚の来遊量が前年並み～上回ることを反映して、沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年並みと考えられる。

(2) マサバ

例年、4～9月期はマサバの盛漁期にあたらなため、漁獲は低調に推移するが、1歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、7月以降には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。2008年級群の豊度は2007年級群より高く、2009年級群の豊度は2008年級群より低いと考えられる。2010年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向で、初期生残の良否に関わる環境要因の指標と見られる水温（東シナ海南部、2月）が、2010年は2009年と同程度なので（水温が高いと初期生残に不利）、2009年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚（2010年級群）は前年並み、1歳魚（2009年級群）は前年を下回り、2歳魚（2008年級群）は前年を上回ると見積もられる。全体の来遊量は、1歳魚が前年を下回るものの、2歳魚が前年を上回ることから、前年並みと考えられる。

沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることを反映して前年並み、沿岸域の漁況は、前年・平年並みと考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、4～9月期には1～3歳魚（小・中銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。2007年級群の豊度は2006年級群より高く、2008年級群の豊度は2007年級群より低く、2009年級群は2008年級群と同程度の豊度と考えられる。2010年級群の豊度を予測するのは困難であるが、親魚量の水準は横ばい傾向なので、2010年級群は2009年級群と同程度と見積もるのが妥当であろう。これらから、0歳魚（2010年級群）は前年並み、1歳魚（2009年級群）は前年並み、2歳魚（2008年級群）は前年を下回り、3歳魚（2007年級群）は前年を上回ると見積もられる。来遊群の主体となる0・1歳魚がそれぞれ前年並みであることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

近年、沖合域、沿岸域（鹿児島県）の漁況の指標は変動が大きい。沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることを反映して前年並みと考えられる。沿岸域の漁況は、4～6月は2月以降の漁況が継続するので、3歳魚主体で前年・平年を下回り、7～9月は1歳魚主体で前年・平年を上回ると考えられ、期間全体としては、前年を上回り、平年並みと考えられる。

(4) マイワシ

例年、4～9月期の前半は1～3歳魚（中・大羽銘柄）が、後半（夏以降）は0歳魚（小・中羽銘柄）が主に漁獲される。近年、日本海・東シナ海に生息するマイワシの資源量は全体としてはゆるやかながら増加傾向にあると考えられるが、山口県～鹿児島県の沿岸域では散発的な漁況が続いている。今後も同様の傾向が続くと考えられ、来遊量は低調であった前年並みで平年を下回ると考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、4～9月期には期間の前半に1・2歳魚（大羽銘柄）が、後半に0歳魚（小羽銘柄）が主に漁獲の対象となる。2009年8・9月に九州西岸から対馬海峡における海域で行った計量魚群探知機の調査結果では、2009年級群の現存量指標値は前年を上回った。しかしながら各県の漁獲量と体長組成の経過からみると、2009年級群の豊度は2008年級群と同程度と考えられる。2010年級群の豊度を予測するのは困難であるが、産卵親魚量が前年並みであることから2009年級群と同程度と考えられた。したがって全体として来遊量は、前年・平年並みと考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、4～9月期には4月に1・2歳魚（大羽銘柄）が、5月以降には0歳魚（カエリ・小羽銘柄）主体に1歳魚（大羽銘柄）が漁獲の対象となる。2009年8・9月に九州西岸から対馬海峡における海域で行った計量魚群探知機の調査結果では、2009年級群の現存量指標値は前年を下回った。また各県の漁獲量と体長組成の経過から見ても、2009年級群の豊度は2008年級群よりも低いと考えられる。2010年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2010年の1月以降には産卵親魚の主体となる1・2歳魚（大羽銘柄）の漁獲量が前年を上回ったので、2009年級群を上回ると考えられる。0歳魚が漁獲の主体となることから、全体として来遊量は不漁であった前年を上回り平年並みと考えられる。

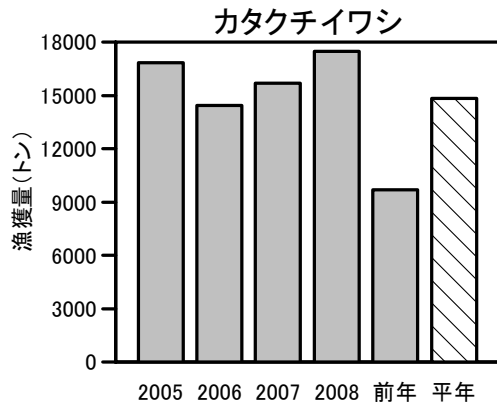
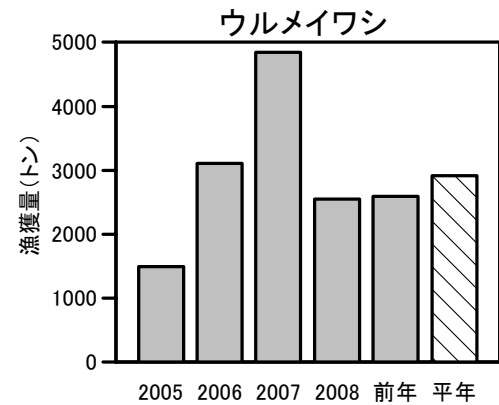
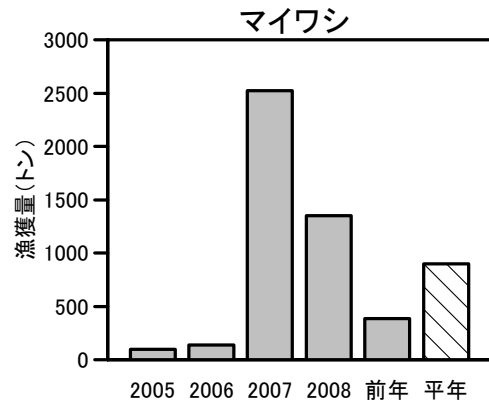
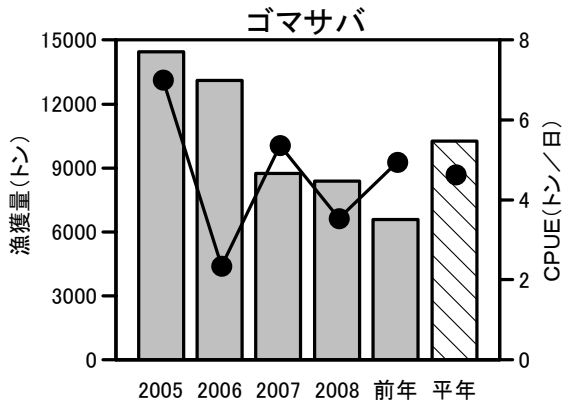
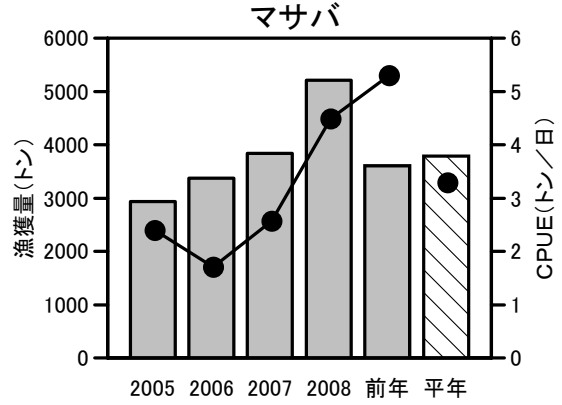
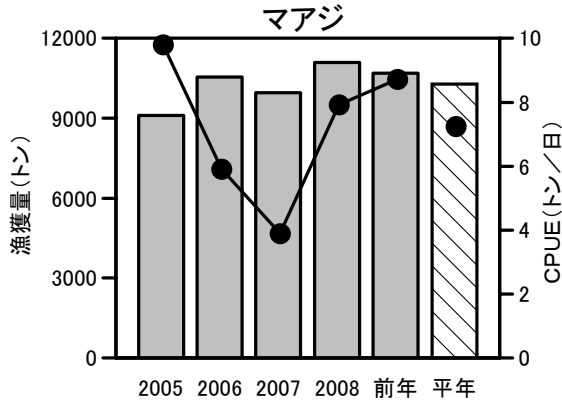
表 1. 沿岸域の漁況経過 (2009 年 11 月～2010 年 1 月、一部 2009 年 9、10 月を含む)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	<p>中型まき網で 617 トンの水揚げがあった。これは前年比 179%、平年比 147%で前年・平年を上回った。棒受網では、トウマゴ (10cm 以下) が 0.1 トン水揚げされ、前年比 54%、平年比 43%であった。</p>	<p>中型まき網で 243 トンの水揚げがあり、前年比 64%、平年比 87%で前年を下回り、平年並みであった。棒受網では水揚げされなかった。</p>	
福岡	<p>中型まき網の漁獲量は 159 トンで、前年比 310%、平年比 54%と不漁。小、ゼンゴ銘柄が主体。棒受網の漁獲量は 2 トンで、前年比 6%、平年比 2%と不漁。</p>	<p>中型まき網の漁獲量は 102 トンで、前年比 76%、平年比 38%と不漁。ギリ銘柄が主体。棒受網では全く漁獲されなかった。</p>	<p>ほとんど漁獲されなかった。</p>
佐賀	<p>前年・平年を下回った。(前年比 27%、平年比 37%)</p>	<p>前年・平年を下回った。(前年比 6%、平年比 7%)</p>	
長崎	<p>前年・平年を下回った。(前年比 73%、平年比 45%)</p>	<p>地域により差があるが、概ね前年・平年並み。(前年比 95%、平年比 87%)</p>	
熊本 牛深港	<p>水揚量は 95 トンで前年比 123%、平年比 134%であった。</p>	<p>水揚量は 136 トンで前年比 27%、平年比 37%であった。</p>	
鹿児島	<p>県 4 港のまき網では、豆アジ・小アジ(2009 年級群)主体の漁獲となった。例年、1 月以降、豆アジ (1 歳魚) の漁場が、鹿児島湾口部に形成されるが、今年はまとまった漁場が形成されずに経過している。期間中合計で 561 トンの水揚げで、前年並みで、平年を下回った。(前年比 91%、平年比 74%)</p>		<p>県 4 港のまき網では、期間中、薩南海域が主漁場となり、11 月はゴマサバ豆・中(2009 年級群・2007 年級群)主体、12・1 月はゴマサバ中(2007 年級群以上)主体であった。 期間中合計で 1,668 トンの水揚げで、前年・平年を大きく下回り、低調に推移した。(前年比 32%、平年比 35%)</p>

表 1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網、棒受網ともに水揚げされなかった。	中型まき網、棒受網ともに水揚げされなかった。	棒受網で 26 トンが水揚げされ、前年比 28%、平年比 15% であった。銘柄組成は中小羽が 3 トン (12%)、シラスが 23 トン (88%) であった。
福岡	中型まき網ではほとんど漁獲されなかった。棒受網の漁獲量は 23 トンで、わずかしら漁獲されなかった前年・平年を大きく上回った。	中型まき網の漁獲量は 18 トンであった。棒受網ではほとんど漁獲されなかった。	棒受網 (集魚灯利用すくい網含む) の漁獲量は 5 トンで、前年比 6%、平年比 18% と不漁であった。
佐賀	12 月にわずかな漁獲があった。(平年比 68%)	漁獲なし。	前年を上回り、平年を下回った。(前年比 485%、平年比 66%)
長崎	ほとんど漁獲が見られなかった。	前年・平年を上回った。(前年比 612%、平年比 497%)	前年を上回り、平年を下回った。(前年比 787%、平年比 38%)
熊本 牛深港	水揚量は 30 トンで前年比 28,050%、平年比 384%であった。	水揚量は 1,327 トンで前年比 787%、平年比 866%であった。	水揚量は 583 トンで、平年比 133%であった。
鹿児島	県 4 港のまき網では、ウルメイワシに混じって漁獲があった。期間中合計で 42 トンの水揚げで、前年を上回り、平年並みであった。(前年比 698%、平年比 92%) 北薩海域の棒受網でも混じりで 1 トンの水揚げがあり、前年・平年を上回った。(前年 0 トン、平年比 1,078%)	県 4 港のまき網では、期間中、中羽主体に大羽混じりで枕崎沖～野間池沖に漁場が形成され、1,238 トンの水揚げで、前年並みで、平年を上回った。(前年比 116%、平年比 187%) 北薩海域の棒受網では 62 トンの水揚げがあり、前年並みで、平年を上回った。(前年比 93%、平年比 262%)	県 4 港のまき網では 137 トンの水揚げで、前年比 6,635%、平年比 75%、北薩海域の棒受網では 33 トンの水揚げで、前年比 500%、平年比 40%であった。 【シラス】西薩海域では、495 トンの水揚げで前年比 232%、平年比 120%、志布志海域では 150 トンで前年比 124%、平年比 81%であった。

注：「前年」は 2008 年 11 月～2009 年 1 月、「平年」は過去 5 年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。4～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター
熊本県水産研究センター	西海区水産研究所
鹿児島県水産技術開発センター	